

『対話による建築・まち育て』

～参加と意味のデザイン～

2003年11月21日(金)コリンザ・あしびなーで開催されたまちづくりセミナーは、延藤安弘氏の講演で始まり、活発な意見が交わされたパネルディスカッションと進み、多くの参加者にまちづくりと建築の意味について示唆を与えていただいた。

講演は延藤氏の‘まちづくり伝道師’としてまさに面目躍如たるもので、2つのスライドを器用にも同時に使い内外のまちづくりの事例を紹介された。氏の語り口がまた面白く、絵本を子供に読んで聴かせる親のようでもあった。ご講演内容についてはビデオにて録画してありますので是非事務局から借りて観ていただきたいものです。

パネルディスカッションは、延藤先生に、コーディネーターになっていただき、パネラーに建築家・連健夫建築研究室代表の連健夫氏、沖縄県技術士会会長の備瀬ヒロ子氏、(社)沖縄県建築士会副会長の中本清氏の4氏で行われた。

連氏からは、イギリスAAスクールにおける研究生活体験の話や日本の建築教育との違い、AAスクールの創造性を育てる手法など熱っぽく語られた。

上原部長は沖縄市のまちづくりに関わる3つのプロジェクトについて語られ、行政側

と一体となって進める市民参加の重要性や政策実施における市のスタンス等について話された。

備瀬氏は、八重山の竹富島における調査・研究を通して、島で生活しているおばあちゃん達への思いを伝えていただいたこと、建築家との地域との関わり方の違いなど、大変面白く拝聴することが出来ました。

中本氏は、建築士会の立場から会員のまちづくりへの参加の必要性や関わり方など、地域のまちづくりプロジェクトへの積極的な参加も呼びかけた。

今回の建築セミナーが実施出来たのは、まちづくり委員会メンバーの熱心な取り組みや沖縄市の関係者、特に沖縄市支部の皆さんによる事前の準備や会場設営、懇親会のセッティング等々、ご協力の賜であり心から感謝申し上げます。また当日お配りした資料へ広告を載せていただいた賛助会員のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

まちづくり委員長
知念信正



延藤安弘氏

連健夫建築研究所主宰
連健夫氏沖縄県技術士会会長
備瀬ヒロ子氏沖縄県企画部長
上原 秀雄氏沖縄県建築士会副会長
中本 清氏

以下 当日アンケートの回答

1. 今日の幻燈の映像と話の中で印象に残ったことを自由にお書き下さい。

- ・もぐらの話から、わろうべ会に進み、関連した話を色々して下さって、楽しめました。
- ・今日、参加した事で、町づくりにはやはり住民の積極的な参加が大事だと改めて感じさせられました。四街道市の人々は、1人1人がみんなの立場となって、意見を出し合い町を育て、とても関心させられました。
- ・とてもおもしろかった。延藤先生の地域参加についてのパネルを見た時にまず初めに、とてもおもしろいと思いました。先生の話に引き込まれていってしまっ、時間がすぎるのが早かったです。
- ・沖縄で「住民参画のまちづくり」を目的としたNPO法人コミュニティおきなわの副理事をつとめています。延藤先生のお話のひとつひとつに「そう、私たちが目指しているのはこういうことなのだ」とうなずきながら聞いておりました。専門家や行政の方々と一緒に自分たちの空間を作りあげていく住民のわくわくした気持ちや伝わってくる幻燈でした。
- ・わろうべ会（ワークショップ）で、市民の人たちが考えた寸劇や、子供達のワークショップなど、「遊び心」をもち、たのしくかつ、本気で時分『まち』のことを考えていることがとても印

象的であった。

- ・“わろうべの会”のワークショップの進め方や住民の積極的な参加姿勢を見てすごいなあと思いました。自分達の地域にできる自分達のための建物を造るにはその造るプロセスの中に住民自らが関わることでより一層地域に対する思いが強くなり「いい建物を造ろう」という意志も強くなっていくんだろなあと思いました。そして建物が建ち上がってそこで終わりというのではなく、そこから再なるスタートとなるんだと思いました。
- ・「遊び心」というキーワードが心に残った。「遊び心」は住民の夢や理想で、社会に出て現実の壁にぶつかるとかいてあきらめられてきて今の社会ができたように思う。もっと住人の遊び心をかなえられるまちづくりを実現させてほしい。遊び心を持つ若い意見を取り入れ遊び心を持ったまま大人になれるまちづくりを目指してほしい。
- ・まちづくりのなかでまず「人ありき」を根幹にすえている。もっともっと広げていきたい。スライドの写り具合が悪い。もっと明るく写してほしい。
- ・ムズかしい言葉ではなく、絵本という分かりやすいものが、最初の導入だったので、楽しく聞きました。
- ・事例については、WSに参加している住民の方の多さにおどろきました。私がかか

わったWSは、まず人を集めること、興味をもってもらうこと、というのが課題です。設計にまで住民がかかわれると、地域への愛着意識も高まるのではと思いました。

- ・コンセプト プロセス
- ・地域住民に参加させることは難しいと考えていたが、考え方の一つで+αの設計ができると思った。住民の思いを知ることのチャンスでもある。

2. 疑問に思ったこと、もっと深めたいと思ったことを自由に…

- ・備瀬さんと連さんは、対立しているような感じがしましたが、最終的には、対話重視という事で、同じではないのだろうか。
- ・年月が過ぎ、町づくりを行った町での人々の自分の町に対しての関心は、「変わる事はないのだろうか。」と思った。
- ・住民の暮らしを中心に考え、地域で考えると、対立などが多いという事にびっくりしました。でも、この対立を生かしていくことで、地域に生きているという実感をいただけるのだと思い、今後、もっと深く考えたいと思った。
- ・「絵本にみる住宅と都市」に興味をもちました。先生のご本、とり寄せて読んでみます。
- ・沖縄ではまだ自民参加が、はじまったばかりだと思う。まちづくりは、長期であり、

気が遠くなるような時間を必要とするものである。

今、徐々に広がりがつつある『まちづくり』を本当に成功させるために、もっと住民の意識を高めるためにはどうすればいいのかと思った。」

・「わろうべの会」のワークショップはなぜあんな風がいい雰囲気で始終続いたのですか？全てスムーズにいったのですか？

・「意味」の意味が現時点でよく解らない。もっとかみくだいて知りたい。興味がわいてくる。

・住民参加の手法は、それぞれ地域で合う、合わないがあると思いますが、先生が実際に行った事を、具体的に聞きたかったです。

・コーポラティブの話をもうちよっと。ユーユートについてのプロセスについて。

・発注者の理解も大事だと思（工期など）。

・まちそだてというキーワードのように、建ってからも人に使われてこそ育っていくような建築ができないものか探りたい。

3. 自分の地域でやってみよう

と思ったことを自由に…

・地域の住民との交流が大切と、備瀬ヒロ子さんがおっしゃってたのが、心にひびき、災害があった場合、どこの県だったか忘れたが、住民の交流のおかげで、被害が小さかった話を思い出した、自分も、ささやかながら、地域の交流のかけはしになりたいと思う。

・緑を増やし、「水」をきれ

いにしたい。近くの川が、年々、汚れていってるので。やはり、沖縄は自然を大事にすべきだと思う。

・中の町からまずは、活性化させていくべきだと思う。もっと人が集まってもいい地域だと思うのに、最近あまり人がいないので人々が集まりやすい地域を造って欲しいです。

・住宅参加でまちづくりをしてみたい。私の住むこの沖縄市で。（アリアイづくりのワークショップではなく、しっかりと住民のかかわったプロジェクトを）

・敷地たんけんツアー。子供達を敷地につれていき大人が思いつかないような空想を少しでも実現させてあげたい。

・このようなフォーラムを行政もやった方がいいと思う。今のところ沖縄市においてない。

・地域と住民が根からとけこむ状況づくり。

4. 講演のすすめ方、その他お気づきのことを自由に…

・延藤さんの話し方はとてもユニークで、かんたんに話していただけていたのですが、もう少し、つっこんで話してほしい事がありました。

・とても、おもしろく、眠気にもおそわれる事がないぐらいでした。時間が短すぎたのが、残念です。

・延藤先生と、4人のパネリストの皆さんの考え方は、皆それぞれ違うんだという事を知り、皆さんの話すべ

てが今後の勉強に生かしていけるようにしたいと思いました。ありがとうございました。

・活動の弁士の語りを聞いている弁士の方でした。確かにもう少しゆっくりと話していただいた方がいいと思いますが、時間の都合で仕方がないでしょうか。今回このようなセミナーを催してくださった主催者に心から感謝します。

・固すぎて、わかりにくかった。むずかしいと思うが、パネルディスカッションでは、お互いに話し合うようなやり方がおもしろいのではないかと感じた。これをやったことは意義があると思うが…

・連さんの発表は講演の中に組み込んだ方がよかったのでは。時間が足りない。こんなすばらしい進め方はあまり経験したことがない。延藤先生ありがとうございました。又、沖縄でやってください。

・パネルディスカッションの最初の、お一人お一人のお話が長かったように感じます。地域の資源をどうか、という議論を、もっとして欲しかったです。

・パネラーのみなさんの発言はもうちょっと短かめの発言がよかった。ありがとうございました。又、沖縄での講演、まちづくり活動楽しみにしております。

対話による建築・まち育て～参加と意味のデザイン

沖縄パネルディスカッションに参加して



建築家 連 健夫

まず最初に、地味ではあるが今日的で大切なテーマを扱ったパネルディスカッションを主催して頂いた沖縄建築士会・まちづくり委員会の皆様に感謝したいと思います。ことばだけの「街づくり」が蔓延している問題、建築家が市民参加は自分の作品づくりからは無縁のものという古臭く思い上がった意識が依然として存在する今、この課題に真正面から答えるべく発刊された「対話による建築・まち育て」（学芸出版社）日本建築学会、意味のデザイン小委員会編著を手がかりにディスカッションした今回の企画は、沖縄建築士会の塩真氏との交流の中から生まれたのがきっかけでした。氏にも心から感謝しています。

この企画のポイントは、1. 本物の市民参加の街づくり、街そだてとは何なのか。2. そのための行政、専門家、市民の役割は何なのか。3. これからの建築とは何なのか、です。前半の延藤安弘先生の講演は、千葉県四街道の福祉センターづくりにおいて、市民参加の活き活きとしたプロセスを経て、建築が実現するという内容で、これこそが、本物の街

づくり、建築づくりであると感じさせる分かりやすい講演でした。

氏は日本におけるコーポラティブ住宅やまちづくりにおけるリーダー的存在で、アカデミックな探求と共に街づくりに自ら参画するという実践家です。このことは、3年の任期を残して千葉大学教授の地位を捨て、名古屋のNPOまちの縁創育み隊の理事へと転身されたことから十分伺えます。この講演で浮き上がってきますのは、対立を創造のエネルギーに変えることの大切さです。行政と市民の対立、市民と専門家の対立、市民と市民の対立、その状況を瞬時に判断できる柔軟な考えと、前向きなエネルギーに変換する勇気の必要性です。これは本著で描かれているコミュニケーションの3つの創造的態度、すなわち、受容的理性、横断的感性、ことへの関心でもあります。

後半はパネルディスカッションです。沖縄県技術士会、会長の前瀬ヒロ子氏、沖縄市企画部、部長の上原秀雄氏、沖縄建築士会、副会長の中本清氏、と私の4人でした。私

の建築まち育ては創造的である」と「住民参加のデザインプロセスは建築思潮において本流である」であり、AAスクールでの建築教育、現代の建築史をスライドで説明しました。前瀬氏は「住民参加の意味と利害」「武富島の事例から学ぶまち育ての知恵」を紹介し、その苦悩を語られました。上原氏は「沖縄市のまちづくりに関する施策」について、これからの課題を含めて話されました。中本氏は「建築士会のまちづくり活動」と「まちづくりに関する建築士の役割」を、沖縄の実状を含めて話されました。その中で浮き彫りになった論点は、「まちづくりの地域性」であります。街づくりのプロセスにおいて、その地域の「たからとあらを住民と一緒に探す」中で、あらをポジティブに解釈することによって、新たな意味を見出す。そのことによって地域性を拾う、しっかりと拾うことができるのではないかと。また、ワークショップという外国産の言葉ではなく、「あしびなー」すなわち遊びの庭など、地元の言葉、表現を使っていくことの大切さを指摘されました。

もうひとつの論点は、対立を創造的なエネルギーに変換することの大切さです。対立をネガティブに捉えるのではなく、むしろ創造の探求には不可欠であり、それを避けては何も生まれないということです。確かに実際、対立は存在します。それを乗り越えるのは大変なエネルギーを要します。しかし、バックグラウンドの異なる様々な人間が集まって街づくりを行うプロセスの中では、当然、対立、摩擦、差異があるわけで、そ

のことを対立ではなく、創造の卵として捉えるポジティブな意識が必要なのです。そうでなければ、従来の最大公約数的なコンセンサス思考に留まり不満の残る結果となってしまいます。対立を消去するのではなく、足し算的に混ぜることによって、ジャンプのある解決策が見出せるというポジティブな態度が必要になってきます。そこには、あなたは行政だから、あなたは建築家だから、あなたは住民だから、という差別的視点で議

論に壁をつくるのではなく、共につくる人間だという本質的な見方、態度によって壁を乗り越え、意味を見出すことが可能になるのではないのでしょうか。今回のパネルディスカッションを通じて、私自身の専門性を改めて考えさせられる良い機会となりました。これからも、東京と沖縄という社会、文化の違いをポジティブに捉え、交流を続けていきたいという思いを強くしました。